

1. 大野説の問題点

——文法的特徴に関して

家本太郎

1. はじめに

この覚え書きは、大野晋博士によって『日本語以前』(1987)および『日本語の起源』(新版)(1994)(以下ではそれぞれ『以前』『起源』と省略する)において示された「日本語＝タミル語同系説」に対して、ドラヴィダ言語学の立場から、主として文法構造に関わる幾つかの疑問を提出し、日本語とタミル語の比較上、相違となる点を指摘するものである。この覚え書きは、大野博士の御説を批判することを専らとするものではない。それらについて体系的に説明できる反論、仮説が提出されるなら、同系説を強化することになり、筆者の批判は廃棄されるべきである。また、学説全体にわたって検証することは筆者の能力の許すところではなく、断片的な指摘に留まることをお許しいただきたい。

2. 文法構造について

以下では、文法構造に関し、疑問と思われる点を挙げる。

2.1.1. 大野博士は、『起源』の旧版において、「琉球語と日本語との同系を証明するには、助動詞と助詞とが日本語と対応することを示す必要があるが、……」(同書 p. 95)と述べられて以来、当該事象の対応に第一義的な位置を与えておられる(『以前』p. 66ff, p. 243ff, 『起源』p. 52ff)。(但し、他の箇所では、助動詞や格助詞以外の助詞は、通時的に不安定な要素であると述べ、動詞のような残存率の高い範疇を比較の際の基準として用いるべきであるとも主張されている〔同書 pp. 209-210〕)。果たして、助詞、助動詞以外の動詞組織全体にわたる対応現象がタミル語と日本語の間に見られるのであろうか。

日本語においては、上一段や四段といった差異をもつ活用形式の体系が、特異的であると言えようが、タミル語との対応については如何にお考えであろうか。

例えば、『起源』44頁以下で述べておられる、タミル語における係結び的現象は、これまでタミル語学では看過されてきて、大野博士のような立場に立って初めて見えてきた問題の一つであるが、この現象などは、動詞構造の全体的対応現象を整合的に記述して初めて同系性に関して平行的現象であると言えるのではないだろうか。係結び自体が、新しい現象だとする説もあると聞いている(木田1991)。換言すれば、係結びの起源と発展、助詞や助動詞の形式と用法などが余りにも類似しており、両言語が同系であれば、動詞構造全体にわたる対応が見られるはずであるとの感を禁じ得ない。

2.1.2. 次に用語に関してであるが、大野博士はタミル語の *-in*, *-oṭu* などを助詞あるいは小辞と呼んでおられるが、これらはドラヴィダ語学では、文法関係を示す格の格語尾または格表示接辞と呼び慣わされている。更に *-tt-*, *-nt-* を助動詞と呼んでおられるが、これ

らは日本語の助動詞のように活用せず、ドラヴィダ語学では、時制表示接辞と呼ばれ、*-ventum* などが助動詞と呼ばれるものである。ドラヴィダ語学で助動詞とされているのは、本来的な主動詞（または本動詞）としての機能を保持し、複合動詞後項において (verbal participle や不定詞が前項となる)、主動詞のアスペクトなどを表示する機能をもつ範疇である。⁽¹⁾

2.1.3. 過去時制表示接辞として、大野博士は、*-tt-*、*-nt-* のみを挙げて、ツ、ヌとの対応を示しておられる (『以前』 p. 306ff、『起源』 p. 58ff)。タミル語では、*-i(n)-* および *-t-* も生産的であるが (古代タミル語における、これらの接辞の生起する環境については、Agesthalingom 1979: 165ff を参照)、これらに対応する助詞は存在しないのであろうか。『以前』306頁では、「*t と *i とは数も極めて限られている……」と述べておられるが、何を根拠になさってのご主張であらうか。ドラヴィダ語の動詞形態論を論じた Subrahmanyam (1971: 104ff) を管見しただけでも決して数は限られておらず、多くの基礎的な動詞を含んでいる。⁽²⁾ これらの接辞は、ドラヴィダ諸語に広く分布し、ドラヴィダ祖語に再建される形式である。

ところで、大野博士の音韻対応例では、*-nt-* は日本語の *-d-* と対応するので、当該の助動詞は、ヅとならねばならない。*-t-* が脱落し、*-n-* が *u* を伴うと考えるより自然ではないだろうか。

また、大野博士は、*-nt-* の *-n-* の語源を *nī*, *nīnku* (離れる・去る) と結びつけておられるが、繰り返し述べるように、この接辞はドラヴィダ語全体で一般的な接辞であるのに対し、*nī*, *nīnku* は、タミル語、コダグ語、カンナダ語などの南部ドラヴィダ語派にのみ同源の語が分布する形式であり、2つの形式が同源だとは考えにくい。同様に、*-tt-* もドラヴィダ祖語に遡り得る形式であり、南部ドラヴィダ語派にのみ同源語が分布する *uttu-* (捨てる) とは関係がないのではないだろうか。⁽³⁾

冒頭で筆者は、「ドラヴィダ言語学の立場から」と断りを入れたが、意図するところはこの部分との関連で言えば、以下の如くである。比較言語学の手法によってドラヴィダ諸語間においてある事象の存在が広汎に看取され、形態においても祖語の再構が可能な程に近似している場合、当該言語の当該形式も同じ範疇に属するものと考え、親縁関係を持たない言語のある形式と当該形式が近似した形態をとった場合、余程の特殊な状況を認めない限り、これに第一義の意味を付与しないということである。この考え方はドラヴィダ言語学に限らず、一般言語学的に極く普通に認められるものであり、後述する幾つかのサンスクリット来源である語彙に関しても適用されよう。ここの関連で言えば、*-tt-* および *-nt-* は、共時的には語彙機能をもたず、通時的にも来源を特定できない、純粹に文法的な機能を担う過去表示接辞であるとするのがドラヴィダ言語学の立場である。

別の表現が許されるならば、大野博士の学説のダイナミズムはこの点に集約されよう。ドラヴィダ言語学のコンセンサスを認めず、当該事象に独自の評価を与えるという意味においてそれを超越しており、逆にオーソドックスなドラヴィダ言語学では捉えられない知見を得る可能性も勿論、否定できない。

2.1.4. 大野博士は、『以前』252頁以下「助詞『つ』と小辞 *attu*, *atu* の比較」の項で、「*attu* と *atu* とは音声上の条件で使い分けられる」と述べられ、異形態として扱っておられるが、前者 *-attu-* は、タミル語伝統文法で *cāriyai*、ドラヴィダ言語学で inflectional increment⁽⁴⁾ や empty morpheme と称される範疇である。これらは、本来的には、何らかの文法的機能を持っていたらしいが、共時的には、名詞または代名詞語幹を形成する際に語根要素に付加される要素である⁽⁵⁾。これに対し、*-atu* は属格形成接辞であり、両者は同じ文法的範疇⁽⁶⁾ではない。

2.2. 『以前』300頁以下、「タミル語の動詞語尾」の項で、*-ul*, *-ir*, *-ar* を自動詞化接辞とされているが、共時的には、これらの「接辞」を含む形式自体が語根要素であり、それ以上の分節は不可能である。これらは接辞とは規定できず、日本語の自動詞化接辞と平行する範疇⁽⁷⁾ではない。

2.3.1. 次に日本語とタミル語を比較する際の基準となる文法的範疇について少し述べたい。ドラヴィダ語の場合、既にその『比較文法』194頁以下において Caldwell が指摘したように（大野博士は『国文学 解釈と鑑賞』（1990年4月）において、当該箇所を訳出しておられる）、少なからぬドラヴィダ語の語根は、動詞、名詞、形容詞として用いられる可能性をもつ。語根の「品詞性」が弱いのである⁽⁸⁾。Sambasiva Rao (1973) は、この現象に関連して、幾つかの接辞が名詞、動詞双方の派生に用いられる現象が、ドラヴィダ語では一般的であることを指摘している⁽⁹⁾。因みに、*DEDR* の記載項目を例に取った場合、タミル語では少なくとも558の形式が、名詞と動詞の間で同じ形態をとっている。これは量的に決して少ないとは言えず、この現象は、ドラヴィダ語、タミル語の一大特徴であると考えるが、平行現象は日本語でも看取されるのであろうか。

2.3.2. 日本語とタミル語の間の大きな相違点とされる、タミル語に見られる定動詞の人称表示接辞については、『起源』52頁において、「タミル語の人称接辞は後の発達だといわれている。」と述べられ、日本語の方が本来の形式であるとされている。これは、Zvelebil 博士の同系説に対する positive なコメント（Zvelebil 1985）、Bloch (1946) や Meenakshisundaran (1965) において示された見解を是認されたご意見であると考えるが、人称接辞の問題はより詳細な考察を要する。確かに古代タミル語では定動詞の人称接辞が体系的でなく、また、頻繁に省略されること、時代が下るにつれて整備されること、ドラヴィダ比較言語学の立場からも人称接辞の祖形を再建するのが容易でないことやタミル語の西部に隣接するマラヤーラム語が人称接辞をもたないことを考えれば納得のゆく見方ではある。しかし、マラヤーラム語を除く全てのドラヴィダ語で人称接辞が存在することも事実であるし、より注目すべき問題は、「人称」という文法的範疇がドラヴィダ語の場合、定動詞のみに関わる範疇⁽¹⁰⁾ではないことである。Bloch や Meenakshisundaran も現代語風な定動詞構造が、後代の二次的発展であるとしているだけで、人称という現象自体が本来的に存在していないと考えているわけではない。別の言い方をすれば、彼らが言及している改新とは、名詞的言語から動詞的言語へのそれである⁽¹¹⁾。

2.3.3. 人称に関して先ず触れておかねばならない文法的範疇は、ドラヴィダ語学で人

称名詞 (personal noun, 代名詞化名詞 pronominalized noun と称されたことがある) と称されるものである。これは、ドラヴィダ語に特徴的な形態的派生法のひとつで、この範疇が最も生産的な古代タミル語を例にとると、数詞を含む名詞あるいは形容詞の語幹に性・数・人称を表示し、形態的に人称代名詞と類似する接辞を付加することによって形成される。古代・中期のタミル語では、格表示接辞をとることができる。形態的には、人称名詞形成接辞は、派生接辞であり、屈折接辞でもある。

例えば、

aṭi-y-ēn

foot-1s

'myself (at your) feet, myself (your slave)'

tēvar-īr-ai-p-pukalntu

God-2p-acc-having praised'

'having praised you, o god'

vall-ai-y-āl

strong-2s-ins

'by thou who are strong'

人称名詞は、北部、中部、中南部および南部の各ドラヴィダ語派で在証されることから、タミル語がその祖語から継承した可能性は高いと言える。日本語に人称名詞と平行する現象が存在するのであろうか。あるいは、日本語がこの現象に関して改新を遂げたのであれば、その痕跡を認めることが可能であろうか。

2.3.4. 人称の問題に関して触れておかねばならない更なる事象は、1988年以来、Steever 博士によって指摘されている連続動詞 (serial verb) 構文である。これは、先述の助動詞による複合動詞 (compound verb) 構文とは、全く別の範疇であり、動詞 (否定動詞を含む) が連続した場合、双方の動詞に人称接辞が付加される形式である (複合動詞構文では、後項の動詞のみが人称表示する)。即ち、定性 (finiteness) が示されないどころか、二重に表示されるのである。この範疇も15のドラヴィダ語において在証されていることからドラヴィダ祖語に遡ることは疑いを容れない。

cel-v-ēm all-ēm (Puranānūru 31. 11)

go-fut-1p become-neg-1p

'we will not go,'

(Steever 1988: 42)

更に、前述の項との関連で、以下のような例があることを付言しておこう。

irak-k-u vār-ēn. (Paṭirruppāṭṭu 61. 11)

beg-fut-1s come-neg-1s

'I do not come to beg.'

ここでは、1人称単数が二重に表示されているが、一方において異形態が取られている。人称接辞が発展段階にあり、様々な形態が現れると考えるより、人称表示という強い要請が先ず作用したと考える方がよさそうである。

果たして、この連続動詞構造に関しても日本語に平行する現象が存在するのであろうか、または、日本語がこの現象に関して改新を遂げたのであれば、その痕跡を認めることが可能であろうか。

2.3.5. 日本語とタミル語の更なる相違は、両言語の文法構造における否定構造のあり方である。タミル語には、前述のような否定動詞 (*al-* および *il-*) を用いた統語的否定構造と形態的否定構造がある。

形態的否定構造の特徴は、否定表示接辞 ($-\bar{a}\sim-\bar{at}\sim\phi$) によって動詞の否定語幹が形成され、それに他の機能を表示する接辞が付加されること、即ち、動詞組織全体が肯定動詞組織と否定動詞組織に分かれ、それぞれが更に定動詞組織と不定動詞組織に分かれること、およびゼロ否定の存在である。

まず、前者の例を挙げよう。

ari·y-ā-a!

know-neg-3f

'she did not know'

ari·y-ātu

know-vp. neg

'without knowing'

coll-āti

say-imp. neg

'do not say'

ゼロ否定形式は、言語類型論的には非常に珍しい形式であると伺っているが(河野六郎先生の御教示による)、通時的には、母音で始まる人称表示接辞と否定形成接辞が融合し、ゼロ形式になったと考えられる。共時的には、動詞語根に人称表示接辞が直接、付加された形態素配列となる。

cey-φ-ān

do-neg-3m

'he did/does/will not do'

古代日本語の否定形式は、例えば、*arazu*「あらず(非ず)」は、*ar-*(動詞語幹)+*-a-*(語幹母音)+**-n-+su*と分析されるとのことであるが(Miller 1971: 邦訳309-310)、否定語幹母音がタミル語の否定形成接辞 $-\bar{a}-$ と類似する以外に平行的な現象が観察されるのであろうか。

否定表現の方法は、古代日本語ではあまり豊かではなかったと大野博士は述べておられるが（大野 1980: 266ff）、タミル語は否定の助動詞を下に接続させることもでき、S is not P. に相当する否定表現を有していた。

例えば、

vall-ēm all-ēm (*Purāṇānūru* 126-5)

strong-1p not-1p

‘we are not ones who are strong’

同系説にたてば、タミル語が日本語から分かれてから発展させた表現法ということになるであろう。しかし、否定動詞 *al-* は、確かに南部ドラヴィダ語派に広く分布する形式であるが、北部ドラヴィダ語派に分類されるマールト語やブラフイー語にも同源の語が在証されることや人称名詞的表現をとることを考慮すれば、この種の表現法は少なくとも南部ドラヴィダ祖語に遡る可能性をもつと言わざるを得ない。

2.3.6. タミル語では、先述のように、語根要素の品詞性が希薄で、語根複合語を形成した場合は前項要素が形容詞、名詞あるいは動詞として機能する可能性があるが、句レベルでは品詞性を顕在化させることが可能である。⁽¹²⁾ その場合、形容詞形成接辞、属格表示接辞および関係節形成接辞がそれぞれ用いられるが、*-a* という共通の形態を取る。⁽¹³⁾ 平行した現象が日本語にも見られるのであろうか。

2.4. これら以外の重要な相違点としては、1人称複数代名詞における排除型と包括型の区別、前述の inflectional increment の存在、語根内の母音交替現象、clitic pronoun、他動詞性に関わる affective と effective の区別や文法的範疇としての性の存在などがあるが、ここでは立ち入らない。

2.5. 2つの言語の同系性を証明するに際しては、それらが類型論的事項を共有することは勿論不可欠であろうが、十分条件ではない。インド・アリア諸語のようにドラスティックな変貌を遂げ、ドラヴィダ語と類型論的に非常に相似した言語もある。上に挙げた、人称名詞、連続動詞、inflectional increment、否定構造などの諸特徴は、タミル語（ドラヴィダ語）に特異的なもので一大特徴として認められる。故に、日本語においても、これらに関して平行した現象が見いだされれば同系説にとって有効な証拠となると言える。逆に見いだされなければ、それぞれの言語史において、納得の行く説明が必要となる。

2.6. 翻って両言語の間で共通点と言える現象は、大野博士が挙げておられる類型論的共通事項に加え、日本語の *-te* 形式とタミル語の verbal participle の形態と用法の対応、関係節の形成法と用法の対応、複合動詞の体系⁽¹⁴⁾などが挙げられよう。

3. 語彙の比較について

ここでは、明らかにサンスクリットからの借用語であると考えられるもののみを挙げる。注3で述べたとおり、同系説による説明の方が有効であるとする見方も理論の枠組みの可能性としては認めねばならない。

3.1. *cuki*（「好き」と比定されている『起源』205頁）は、*Tamil Lexicon* にも *sukha*

‘pleasant, happy’の借用であると明記されている。少なくともタミル人はサンスクリットであると意識しているのではないだろうか。

3.2. 「天の原」と比定されている *param* ‘that which is pre-eminent’ (*par-am* と分節され、『以前』89頁では「海」、『起源』対応語一覧14頁では「空」と訳出されているが、DEDR 3949 には *param* なる形式は記されていない) も同様に、サンスクリットの *parama* ‘primary, most prominent’ の借用形式ではないだろうか。

3.3. *amarar* 「天界の人々」(『起源』対応語一覧17頁) も同じく、サンスクリット *amara* ‘undying, immortal’ の借用と考えた方が自然ではないだろうか。

3.4. *mōtakam* (「もち」に比定されている。『起源』94頁、mo: dagam と発音される) も、サンスクリットの *modaka* (‘small round sweetmeat’ ガネーシャ神の好物) ではないだろうか。

3.5. *katai* (「語る」に比定されている。『起源』対応語一覧3頁) も同じく、サンスクリットの *kathā* ‘a tale, story’ と同源であろう。タミル語では有気音 *th* は表記できず、サンスクリットの *ā* はタミル語では *ai* となるからである。

3.6. *kukai* (『起源』対応語一覧4頁) も、*Tamil Lexicon* に *guhā* ‘a cave’ の借用であると明記されている。タミル語では語頭の有声音が表記されず、サンスクリットの *h* は *k* で表記されるからである。

3.7. *pakkam* (「脇」に比定されている。『起源』対応語一覧20頁) も、*Tamil Lexicon* に *pakṣa* ‘a wing, the side of anything’ の借用であると明記されている。

3.8. *paṭam* (「旗」に比定されている。『起源』対応語一覧13頁) もサンスクリットの *paṭam* ‘a garment, cloth’ の借用形式ではないだろうか。

4. 言語基層ということ

大野博士は、『起源』227頁の「タミル人は日本にきたか」において、「来た」と断定され、終章243頁以下では、「オーストロネシア語族の中の一つと思われる、四母音の、母音終りの、簡単な子音組織を持つ言語」が基層となり、その上に紀元前数百年の頃、タミル語がもたらされ、そこに成立した言語がヤマトコトバの体系であるとする説を述べられた。「稲作・金属器・機織という当時の最先端を行く強力な文明」や「安定的な、美味な、滋養に富む食料の生産の技術」を有したタミル人が渡来し、その使用言語であるタミル語が文明を担う言語として日本に広がったと考えておられ、近代ロマンス語の成立過程に比しておられる。

筆者は、言語基層の関わる言語史といった場合、次のようなモデルを考えている⁽¹⁵⁾。基層言語と渡来した、文明を担う言語の間における言語接触が、前者(同系説ではオーストロネシア系言語)の話者たちの後者(タミル語)への大規模な転換(シフト)を起こさせ、その結果として基層言語の特徴が文明言語に浸透して行き、新しい言語が生成される。この過程は、様々な言語現象に関して、文明語を全体的に変貌させるほどにドラスティックであった可能性もある。

大野博士の以前の同系説では、例えば、1980年の論放では、日本語の重層的成立という観

点からタミル語は層の一部であるとされていたし、ドラヴィダ語族とアルタイ語族、ひいてはウラル語族をも包括した、より広い親縁関係の中で同系説を展開しておられたように思う。この理論的枠組みに対して Zvelebil 博士や Vachek 博士などが肯定的な見解を述べられたと理解される。⁽¹⁶⁾『起源』では、朝鮮語をも包含した、より直接的な同系説を唱えられておられる。

基層説は、いわば総体的な言語借用といえる。「借用」に対しては、Zvelebil 博士は否定的である。⁽¹⁷⁾文明に関する基礎的な同源語のセットの存在、基本的な助詞・助動詞の対応（係結びの一部の共通性）や歌の韻律の共通性を説明するための理論的要請によってこのような説に立たれたと考えるが、先述のように、両言語の間には、幾つかの重要な文法構造に関わる相違が存在する。

基層説をモデルにとった場合、基層性が強弱いずれの考えた方をとっても、説明が非常に難しい問題が生起する。即ち、基層性が強かったと仮定すれば、反舌音の消失などの問題は説明可能であろうが、いわゆるアルタイ語的な特徴のみが継承され、既述のドラヴィダ語に特徴的な文法的範疇（繰り返し述べるが、これらはドラヴィダ祖語に再考される範疇であり、タミル語が「渡来した」時期においても保持されていたことは間違いない）のみが何故、日本語において改新を被ったかが説明できない。一方、基層性が弱かったとすれば、何故、「オーストロネシア語族の中の一つと思われる言語」が、本来有している文法的範疇を日本語に持ち込まなかったか、何故、ドラヴィダ語的特徴を除いた、アルタイ語的特徴が統語的に顕著に日本語に見られるかの説明が不可能である。

実体が未だ明らかにされていない「原日本語」がタミル語を変貌させた可能性も想定されるであろうが、同系説を証明するにはこれらの相違点を克服できるような整合的な説明が求められる。但し、それは、アイヌ語と日本語の系統に関する、服部四郎と金田一京助の論争⁽¹⁸⁾に見られるように、言語変化に関わる難しい課題であることは確かである。

注

- (1) 現代タミル語の助動詞の幾つかの用法は、日本語のそれと著しい平行現象を示す。例えば、vp + *muṭi* 「～し終える」、vp + *pār* 「～て見る」、vp + *kāṭṭu* 「～て見せる」、vp + *vai* 「～て置く」、vp + *pōṭu*, *viṭu* 「～てしまう」、vp + *koṭu* 「～てやる」など。構文解析については An-namalai (1982) などを参照。
- (2) *kal-* 'to learn', *kēḷ-* 'to hear', *tōl-* 'to defeat', *vil-* 'to sell' など。Agesthialingom は、*-t-* を基本形と考え、*-k-*, *-ṭ-*, *-r-*, *-tt-* を異形態として記述している。
- (3) 小論はドラヴィダ言語学の立場に拠っている。これらについて大野博士はご存じのはずであり、同系説による説明がより説得力をもつか否かの問題である。後述するサンスクリット系とされる語彙の扱いも同様である。
- (4) Zvelebil (1977: 53, n1) を参照。
- (5) 例えば、*-am* で終わる形式は、日本語のように、無変化語幹ではなく、語尾が *-attu-* と変

化してから、格表示接辞が付加される。

R: *mar*-±deriv.: -*a*-±empty: -*tt*-±case: acc.> *marattai* (Zvelebil *ibid.*, : 19)

- (6) この項で挙げられている *pakkatar* は *pakkattār* の誤記で、「隣人」という意味ではないだろうか。
- (7) これらの接辞を自動詞化接辞とすると、他の言語に存在する同源の形式も自動詞化接辞を含むことになる。また、*alar* には名詞として ‘full-blown flower’ という意味もあり、少なくとも共時的には自動詞化接辞とは言えない。なお、同頁に挙げられている、*am-ir* (沈む、潜水する) は *amiḷ* の、また *vel-ir* は *velir* の誤記であり、「接辞」の *-ir* とは無関係である。
- (8) 家本 (1990: 47ff) を参照。
- (9) 同論文 Ch. 3. を参照。
- (10) 児玉 (1991) は、「人称が、(文法) 性や数と同様に、代名詞だけでなく名詞を含む名詞句一般がその帰属を特定できる文法範疇として捉えられること」を主張している。
- (11) 例えば、Meenakshisundaran (*ibid.*, 88) では、定動詞は通時的には関係節から派生したとされる。

…*ceyta* (relative participle) + *an* or *aḷ* or *ar* will be *ceytān* or *ceytāḷ* or *ceytār*, ‘he who did etc.’ (later ‘he did, etc.’)

また、

‘The sentences seem to have been substantive in nature rather than verbal…the Tamil Finite Verb structure reveals two strata, the earlier one which does not possess the pronominal suffixes and the later one which has the fully developed pronominal suffixes.’

(Meenakshisundaran 1965: 27)

…the flectional system of the pronominal type had developed secondary. It follows the usage of the verbal nouns of pronominal subjects in the nominative.’

(Bloch 1954: 英訳59)

- (12) 実際の形式については、家本 (1990, 1992) を参照。

- (13) 属 格: *cāttan-a yānaikaḷ*

Cattan-gen elephants

‘Cattan’s elephants’

関係節: *cey-t-a*

do-pst-rel

‘which/who did’

形容詞: *cir-i-y-a*

smallness-adj

‘small’

- (14) Annamalai (1982) を参照。

- (15) 例えば、家本 (1994) は、インド・アールリア語とドラヴィダ語の関係を Southworth 博士などの論考を基に述べたものである。

- (16) Zvelebil (1990: 117) を参照。

- (17) *ibid.*, p. 118.

「日本語 = タミル語同系説」を検証する

(18) 大野 (1957: 39) を参照。

略号 (用いた略号は以下の通りである)

1	first person
2	second person
acc	accusative
adj	adjectival suffix
DEDR	<i>Dravidian Etymological Dictionary</i> (1984 ²)
deriv	derivative
f	feminine
fut	future tense
gen	genitive
imp	imperative
instr	instrumental
m	masculine
neg	negative
p	plural
pst	past tense
R	root
rel	relative
s	singular
vp	verbal participle

参考文献

- Agesthalingom, S. (1979) *A Grammar of Old Tamil with Special Reference to Patirruppattu*, Annamalaiagar: Annamalai University.
- Andronov, M. S. (1989²) *A Grammar of Modern and Classical Tamil*, Madras: New Century Book House.
- Annamalai, E. (1982) "Dynamics of Verbal Extension in Tamil", *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol, XI-1, pp. 22-166.
- Bloch, J. (1946) *Structure grammaticale des langues dravidiennes*, Paris: Librairie Adriaire-Maisonneuve, [English translation by R. G. Harshe, Poona]
- Burrow, T. & M. B. Emeneau. (1984²) *A Dravidian Etymological Dictionary*, Oxford: Clarendon press.
- Caldwell, R. (1976³) *A Comparative Grammar of the Dravidian or South-Indian Family of Languages*, Madras: University of Madras.
- 家本太郎 (1990) 「古層カンナダ語の複合語記述の枠組みについて」『西南アジア研究』(京都大学西南アジア研究会) 第33号、pp. 33-55.
- 家本太郎 (1992) 「タミル・カンナダ両言語における形容詞記述に関する覚え書き—複合語形成

- との関連で—」『南アジア研究』（日本南アジア学会）第4号、pp. 79-87.
- 家本太郎（1994）「インド言語圏論—ドラヴィダ言語学の立場から」辛島昇（編）『ドラヴィダの世界』東京：東京大学出版会、pp. 239-251.
- 木田章義（1991）「『二段古形説』補—係結びの場合—」『愛文』（愛媛大学法文学部国語国文学会）第26号、pp. 1-21.
- 児玉望（1991）「テルグ語の主格人称接辞—名詞屈折範疇としての人称」『文学部論叢』（熊本大学文学会）第35号、pp. 1-21.
- Meenakshisundaran, T. P. (1965) *A History of Tamil Language*, Poona: Deccan College Post-graduate and Research Institute.
- Miller, R. A. (1971) *Japanese and the Other Altaic Languages*, Chicago: The University of Chicago Press.〔西田龍雄監訳（1981）『日本語とアルタイ諸語』東京：大修館書店〕
- 大野晋（1957）『日本語の起源』（旧版）東京：岩波書店.
- 大野晋（1980）『日本語の成立 日本語の世界1』東京：中央公論社.
- 大野晋（1990）「日本語とタミル語の関係（87）」『国文学 解釈と鑑賞』第55巻4号、pp. 208-215.
- Sambasiva Rao. G. (1973) *A Comparative Study of Dravidian Noun Derivatives*, Doctoral dissertation, Cornell University.
- Steever, S. B. (1988) *The Serial Verb Formation in the Dravidian Languages*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Steever, S. B. (1993) *Analysis to Synthesis*, New York・London: Oxford University press.
- Subrahmanyam, P. S. (1971) *Dravidian Verb Morphology*. Annamalainagar: Annamalai University.
- Zvelebil, K. (1977) *A Sketch of Comparative Dravidian Morphology—Part one*, The Hague: Mouton.
- Zvelebil, K. (1985) “Tamil and Japanese—are they related? The hypothesis of Susumu Ohno”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XLVIII-1, pp. 116-120.
- Zvelebil, K. (1990) *Dravidian Linguistics—An Introduction*, Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.